陳舜臣さんを語る会通信

NO.114　Apr.　2024

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2024年4月1日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

陳舜臣さんは毛沢東に心酔!?「詩人教師毛主席」

1976年9月9日、毛沢東（1893-）が亡くなった。毛沢東死去の情報に接し、陳舜臣さんは「歴史を見る毛主席」を『朝日ジャーナル』（9月24日号）に、「動揺する心」を『図書』（11月号）に、「詩人教師毛主席」を『現代』（11月号）に、「巨星墜つ――毛主席のこと」を『小説現代』（11月号）に執筆しました。

ここでは「詩人教師毛主席」を取り上げます。失礼とは思いますが、このエッセーに出会い、陳舜臣さんの、文化大革命に対する反応の緩さが分かったような気がしました。　（編集委員　橘雄三）

毛沢東の革命、政治、思想をつらぬいているのは詩

『現代』（一九七六年十一月号）「詩人教師毛主席」で、陳舜臣さんは、冒頭、次のように語っています。

後世の文学史家は、二十世紀の中国の代表的な文学者として、毛沢東、魯迅の二つの名をあげるだろう。…。

革命家であり、思想家であり、戦略家であり、政治家であり、そして教育家であった。――毛主席にはずいぶん肩書が多い。多くの肩書をかれは煩わしく思ったようで、ある人にむかって、「私の肩書は一つだけ、教師というのがのこるだろう」という意味のことを語っている。どうやら、毛主席は自分の本質を「教師」と考えたようだ。…。

だが、私は毛主席のさまざまな事業――革命、政治、思想をつらぬいているのは詩であるという気がしてならない。すぐれた革命を指導できたのも、人民たちのためのすぐれた教師となれたのも、毛主席のなかに「詩」があったからではあるまいか。たましいのほとばしりが、思想や事業につながり、そこで高らかに脈うっているのだ。

忘れ難い『斯諾・西行漫記』

陳舜臣さんは、昭和19年の秋、東京へ行った。

このときの東京行きで、私にとって忘れ難いことが三つあった。第一は本郷の旅館で倉石武四郎先生から、中国の文字改革の話をうかがったことであり、第二ははじめてB29を見たことである。…。

第三に――最も忘れ難いのは、神田の古本屋で、『斯諾・西行漫記』という中国語の本を買ったことである。…。

じつはその『西行漫記』こそ、『中国の赤い星』(Red Star over China)の中国語訳だったのである。…。

『西行漫記』を読んだとき、私は二十にすぎなかったが、興奮をおさえることができなかった。幾晩も睡れなかったことをおぼえている。…。

――この人がいて、この党を率いるかぎり、中国は滅びない。

そう信じることができたことによって、どれほど人びとが励まされたことか。百年の屈辱をなめ、亡国の淵に立たされたことのない日本人には、救いの星を仰ぐ中国人の心理は理解しがたいであろう。

陳舜臣さんが、神田の古本屋で買ったのは右のような本だったと思える。

一九七二年、毛沢東生家訪問

エッセーの記述に戻ります。

私は一九七二年に、毛主席の生家を訪ね、一九七四年には延安を訪ねた。その土地に立って、革命というものがなにであるか、肩で知ったような気がした。

一九七二年といえば、陳さんが、日本赤十字社の証明書による探親訪問という形で初めて中国を訪問した時だ。このとき、毛沢東の生家を訪問していたとは知らなかった。

私（橘）は一九九三年の年末、友人・王さんと、毛沢東の生誕百年に合わせて生家を訪れた。このときの様子を次頁と次々頁で報告します。

詩人教師毛主席

私の肩書は一つだけ、教師というのが残るだろう

陳舜臣

毛沢東・その生と死

毛沢東生誕百年（1993.12.26）の故郷・湖南省韶山（しょうざん）（1）

27日、いよいよ毛沢東の生家のある韶山へ入る日だ。長沙から韶山まで、列車で四時間かかる。朝早くホテルを出て、７時５分発の韶山行に乗る。

列車の中には「紀念毛沢東同志誕辰一百周年」などと染め抜いた赤い横断幕が掛けられ、窓ガラスには記念のシールが貼られている。幹線から別れ、韶山への支線に入るとスピーカーから「東方紅」や「我愛北京天安門」といった毛沢東讃歌が次々流れ、乗客が合唱する。私たちの向かいの客は、日本人の私を意識してか、体を動かしリズムをとって大きな声で歌っている。王さんも小さな声で歌いだす。

我愛北京天安門 天安門上太陽昇 ♫
偉大領袖毛主席 指引我們向前進

祝賀の雰囲気の高まったところで韶山着。

プラットホームや駅舎には、車内と同じように赤い横断幕が掛けられ、毛沢東讃歌が流れている。改札口を出ると駅の正面高く、毛沢東の肖像画が掲げられている。

韶山駅から毛沢東の生家のある韶山冲（村の名）まではバスで半時間とかからない。毛沢東の故居へは、バス停前の池の横を小高い山の方へ登って行く。路上には、この村の主婦がたくさんのみやげ物を並べ、見学客がそれをとり囲んで毛沢東グッズを買っている。そんな道を二百メートルほど登って行くと毛沢東の故居がある。日干し煉瓦積みに瓦葺き、一部藁葺き屋根の農家で、例えば広東省花県の洪秀全の生家などと比べてずっと立派だ。

毛沢東生誕百周年の12月26日、つまり昨日は14万人の人出があったと、マイクロバスの運転手が言っていた。今日の人出はそれより少ないようだが、それでも、故居の正面の記念撮影によい場所は、順番待ちができている。

私はここに来る迄、いろんな本で毛沢東の生家の写真を見てきたが、前の池には決まって蓮の花が咲いていた。今は冬なので蓮の花はなくても、枯れた蓮の葉や茎ぐらいはあるだろう、と思っていたら、太く長い杭、杭、杭、なんと池の中一面杭だらけなのにはびっくりした。土産物屋の話では、21日にここで毛沢東生誕百周年のテレビ番組の撮影をしたが、杭はその時の足場だというのである。

今度の生誕百周年に合わせ、この村の中心広場に五、六メートルもある毛沢東の銅像ができた。この広場周辺は、三方向から村に入ってくるバス、そしてその客の乗り降りでいつも混雑している。また、この広場は、いつ行っても爆竹の音と煙がすごい。ここで奇妙な光景を目にする、中国の太い大きな線香と爆竹に火を着け、凄い音と煙の中、銅像に両手を合わせている若者がいる。毛沢東は死んで、今や信仰の対象になっているのだ。この光景は、「土産物屋で買った毛沢東グッズを交通安全のお守りに、運転席に吊すのが流行っています」と言っていた王さんの話と符合する。

毛沢東生誕百年（1993.12.26）の故郷・湖南省韶山（しょうざん）（2）

王さんは、テレビ大好き人間である。ホテルに着いて部屋に入ると、まずテレビを点ける。朝起きると一番にテレビを点ける。私に見せようと、点けてくれていたのかもしれないが、そんなわけで私もよくテレビを見た。

この度の旅行中、いつテレビを点けても、どこかのチャンネルで、必ずといってよいほど毛沢東記念番組が流れていた。

12月27日、韶山賓館に泊まった時のことだ。部屋に入っていつものように、王さんがテレビを点けると毛沢東のベッドが映った。

アナウンサーが言っている、

「毛主席は寝ながら読書するのが習慣でした。彼のベッドは普通のベッドより幅が広いのですが、ベッドの三分の二は本の置場になっていました」

ここで、毛沢東の眼鏡がアップで映る。それも、耳に掛ける柄の片方がない眼鏡が。

アナウンサーが続けて言う、

「毛主席は横になったまま何時間も読書をしました。だから右肩を下にして横になっても、左肩を下にして横になっても、眼鏡の柄の片方が邪魔になるのです。それで、右の柄のない眼鏡と左の柄のない眼鏡の両方を持っていたのです」

こんどは、翌28日、長沙の芙蓉賓館でのことだ。

「橘さん、橘さん、この人！この人！見て！見て！」と、王さんがテレビを見ながら叫ぶので私も覗くと、お婆さんが歌っている。日本で言うと、淡谷のり子がナツメロを歌っているようなものだ。

「これが王昆です。艾敬（アイチン）の『我的一九九七』の中に出てきた東方歌舞団の団長の王昆です。これが郭蘭英です。二人とも延安時代からの歌手です」

延安時代というと、1936年からの10年間、蒋介石の国民党に追われて瑞金を放棄し、長征の後、延安を共産党の根拠地にした時期だ。

1981年 王昆（1925年−2014年）（右）
と郭蘭英（1929−）

私たちが泊った韶山賓館

「この時代に王昆も郭蘭英も毛沢東の三番目の奥さんになる江青もやって来たのです。そして延安の人々に歌を聞かせ、劇を見せたのです」

アメリカ人記者、エドガー・スノーの『中国の赤い星』の出版という貢献もあって、延安は中国の愛国的青年男女のメッカとなった。全国各地から何千何万という人々が、日本軍や国民党軍の封鎖を突破して延安に集まり、教育と訓練を受け、また各地に派遣されて行った。

延安はハーモニカの穴のように黄土層の山腹に掘り込まれた洞窟式住居で有名であるが、黄色い土ほこりの町に、抗日軍政大学、延安女子大学、魯迅芸術学院などいくつかの学校が作られた。これらは、教室、宿舎を自分たちで作ることから始める自力更生の学校であった。

江青は愛国的な教宣劇団に加わり、上海を皮切りに武漢、重慶と旅まわりをして1938年延安入りした。延安では魯迅芸術学院に入学、前線慰問の劇団員として訓練を受けた。当時２６歳であった。延安入りして一年もしないうちに４５歳の毛沢東と結婚する。当時、毛沢東は既に賀子珍と離婚していたとする説もあるが、「毛沢東は江青と結婚したいので、賀子珍をモスクワへ追いやったのです」と、王さんは憤慨して言う。

王さんは、こういう品格の点では、周恩来を高く評価する。「周恩来は、夫人鄧穎超（とうえいちょう）との間に子供がなく、革命に殉じた烈士の子供を何人も養子として育てました。李鵬首相もその一人です」

『中国歴史の旅(下)』「井岡山(せいこうざん)については多言を要しません」陳さん、そりゃないよ！

窮地に立つと、「また農村で一からやり直そう」「もういちど井岡山へ登ろう」、それが毛沢東のやり方であった

「詩人教師毛沢東」の記述に戻ろう。

アヘン戦争百余年のあいだ、中国は国として、そして人間として、言いようのない屈辱にまみれたのである。租界で外人が威張り散らし、中国人を動物のように扱ったことは、文久年間に上海に渡った高杉晋作たちが実見している。いつのまにか卑屈が中国ぜんたいを包むかのようにみえた。フランスと戦って負け、日本と戦っても破れた。一九〇〇年の義和団事件では、連合軍に首都を占領された。中国人はすっかり自信を喪失したかにみえた。

なによりも不屈の人間にきたえ直すことが大切である。そのためには自信をつけねばならない。正しい道を見出した人がはじめて確信を持つ。確信をもった人間が不屈の精神を持つ。そのような人間の集団こそが、革命を遂行することができる。

これが毛主席の揺るがぬ信念であった。…。

いつでも一からやり直そうというのが、毛主席のやり方であった。

毛沢東は、同志に裏切られたとき、「また農村に出かけて、一からやり直そう」と言い、国民党勢力の前に後退を余儀なくされたときには「もういちど井岡山へ登ろう」と言った。

ところで、初めての中国訪問時に毛沢東の生家を訪れたり、その翌々年には大寨や延安に行った陳舜臣さんが、生涯、どうして井岡山に登らなかったのか、不思議です。

《1.『中国歴史の旅(下)』「江西の山とまち」の記述》

『中国歴史の旅（下）』は、九つの章からなっています。井岡山は、その一つ、「江西の山とまち」に記述が見えます。この章の分量は、18ページですが、井岡山については、六行の文章の後、「**井岡山については多言を要しません。ここに毛主席の「西江月　井岡山」という詞を引用するにとどめておきましょう**」という素っ気ないものです。どうしてでしょう。

《2.革命根拠地 井岡山》

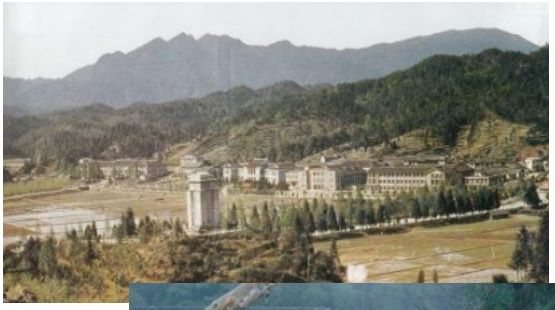
井岡山については、私のホームページ、『中国の友人たち』「井岡山・瑞金への旅」をご覧下さい。

私（橘）は、1997年の暮、中国の友人と井岡山に登りました。革命根拠地は、八百数十メートルから千三百メートルほどの山岳地帯で、しかも、厳寒期だったもので、手がかじかみ、メモを取ったり、カメラのフィルムを交換したりするのが大変だったことが思い出されます。

そんな寒さ、濃霧の中、ぼんやり見える、紅軍病院（下の画像）のでっかく黒い建物は異様でした。診察室、薬草室、重傷者の部屋と続きます。暗い病室に入ると、十分な治療も受けられず、傷の痛みに耐え、寒さに震えている傷病兵が目の前に見えるようで恐ろしくなったことを覚えております。

私には、そんな経験があるので、井岡山には思い入れが強く、「井岡山については多言を要しません」の一言で片付けられる陳舜臣さんに納得いかなかったのです。

下の画像、遠景は講談社『図説中国の歴史９』「井崗山の中心・茨坪の今日」よりの転載で、他の３枚は編集委員の撮影です。



茨坪遠景

茨坪■毛沢東旧居

大井■毛沢東、朱徳、陳毅旧居